

日本語学習者が「に」を使用する要因の調査と日韓学生交流プロジェクト

梅林佑美

1 はじめに

日本語学習者はしばしば(1)のような不自然な「に」を使用する。ここでは「を」が正用である。

(1)*机の中に探します。(正用 を)

(1)は中国語を母語とする JSL 学習者の誤用である。「～の中」「～の上」のような位置を表す名詞の習得に関し、迫田(1998)は、学習者は格助詞の選択を迫られたときに格助詞とその近くにある語とで固定した語として扱って覚えるというストラテジーがあり、「～の中」+「に」のように一語化している可能性がある」と指摘している。しかし、どのような学習者が(1)のような不自然な「に」を使用するのかについては言及されていない。

近年、言語習得に関して、文法規則に関する明示的な情報は、学習者が利用可能なインプット内の言語形式への気づきを助けることによって、第二言語発達を加速させると考えられている(Kara & Janire 2022)。習得場面における誤用の産出には、さまざまな要因が影響するとされてきた。迫田(1998)は、一語化のストラテジーは学習者の母語を問わないのではないかとしながらも、それを裏付ける明確な指摘はなされていない。そこで、本研究は、上述したストラテジーが実際に母語を問わないのか、また、どのような学習者がストラテジーをもっているのかを明らかにするため、その第一段階として以下の調査を実施した。

2 目的

2.1 格助詞の調査の目的

本研究は次の2点を目的としている。第一に、前述したストラテジーは韓国語を母語とする学習者にも見られるのかを検討することである。第二に、韓国語を母語とする学習者のうち、不自然な「に」の使用は学習者のレベルと関連があるのかを明らかにすることである。

2.2 日韓学生交流プロジェクトの目的

後に詳しく述べるが、2.1の調査を実施した際、日常的に日本語母語話者との接触場面が少なく、交流機会を希望する声が多く聞かれた。それには、本調査の協力者が所属する学科は、創立当初より日本就職を目指すことを卒業後の展望の一つに挙げていることにも関係する。卒業を見据えたときに日本語母語話者との交流機会が少なく、運用能力が十分でないことは、実際に、学生たちだけでなく、教師たちからも課題として挙がっている。そのため、本研究の調査に協力してくれた学生と、韓国語日本語学習者との交流の機会を希望する日本語母語話者を対象に、調査協力者の要望を叶えるという目的で日韓学生オンライン交流プロジェクトを立ち上げた。詳細は6章で報告する。



図1 アンケート調査の様子

3 調査概要と調査方法

調査協力者は、韓国国内の大学に在籍し、韓国語を母語とする初級・中級・上級日本語学習者123名である。この協力者を対象に google form を用いて文中の格助詞を問う空欄補充形式のアンケートを作成し(表1)、調査を実施した。調査項目は全18問で、迫田(1998)が指摘する一語化のストラテジーを検討するため、調査文は(2)と(3)

のように「～の上・中・裏」を含まない文と「～の上・中・裏」を含む文の組み合わせとなっている。

- (2) つくえ() そうじします。
(3) つくえの うえ() そうじします。

まず、迫田(1998)が指摘する一語化のストラテジーが韓国語を母語とする学習者にも見られるのかを検討するため、アンケート調査の結果からクロス集計表を作成し、カイ二乗検定を行った。次に、不自然な「に」の使用は学習者のレベルと関連があるのかを明らかにするため、初級・中級・上級に分けてクロス集計表を作成し、カイ二乗検定を行った。

表 1 調査文

<1>	つくえ() そうじします。
<2>	つくえの うえ() そうじします。
<3>	テーブル() みたら、パンが ありました。
<4>	テーブルの なか() みたら、パンが ありました。
<5>	おなか() しらべます。
<6>	おなかの なか() しらべます。
<7>	カップ() あります。
<8>	カップの なか() あります。
<9>	かご() さがします。
<10>	かごの なか() さがします。
<11>	てがみ() よみます。
<12>	てがみの うら() よみます。
<13>	ひきだし() かたづけます。
<14>	ひきだしの なか() かたづけます。
<15>	かばん() しらべます。
<16>	かばんの なか() しらべます。
<17>	パン() みます。
<18>	パンの なか() みます。

4 アンケート調査の結果と考察

表2の「その他」は「を」「に」以外の助詞の

数を示している。「を」と「に」の数に注目してみると、<1><7><9>など偶数番号の調査文は「を」が多く、<2><4><6>など奇数番号の調査文、つまり、「～の中」「～の上」など位置を表す名詞を含む文は「に」が多い。これにより、韓国語を母語とする学習者は、迫田(1998)が指摘する一語化のストラテジーを持っていると考えられる。

表 2 調査結果(全体)

	を	に	その他
<1>	180▲	12▽	10▽
<2>	121▽	65▲	16
<3>	155	31	16
<4>	115▽	69▲	18
<5>	135	19▽	48▲
<6>	110▽	50▲	42▲
<7>	187▲	2▽	13▽
<8>	140	44▲	18
<9>	172▲	10▽	20
<10>	99▽	63▲	40▲
<11>	195▲	1▽	6▽
<12>	151	35	16
<13>	179▲	8▽	15
<14>	129▽	40	33▲
<15>	157	26	19
<16>	101▽	65▲	36▲
<17>	183▲	2▽	17
<18>	133▽	45▲	24

($x^2(34)=513.862, p<.01,$

▲有意に多い,▽有意に少ない, $p<.05)$

次に、韓国語を母語とする学習者のうち、不自然な「に」の使用は学習者のレベルと関連があるのかを明らかにするため、調査の結果を初級・中級・上級グループに分け、カイ二乗検定を行った初級グループから順に結果を述べる。

まず初級グループは、1%水準で文と格助詞に関連がみられた($x^2(68)=132.617, p<.01$)。調査文<1><3><11>は「を」が多く、<2><4>は「に」が多い。

表 3 調査結果(初級)

	を	に	が	で	その他
<1>	30▲	3	1	0	10
<2>	22	14▲	0	2	7
<3>	30▲	4	0	0	9
<4>	21	13▲	2	2	9
<5>	21	5	7▲	4	17
<6>	19▽	10	4	4	14
<7>	21	2▽	9▲	0	20▲
<8>	19	9	3	3	15
<9>	24	9	1	0	10
<10>	21	10	0	4	12
<11>	32▲	1▽	1	0	10
<12>	24	5	2	0	14
<13>	23	4	3	2	16
<14>	21	9	1	5▲	13
<15>	27	4	3	2	12
<16>	21	9	0	3	13
<17>	30	3	4	0	10
<18>	25	7	0	3	11

($x^2(68)=132.617, p<.01$)

▲有意に多い,▽有意に少ない, $p<.05$)

中級グループも、1%水準で文と格助詞に関連がみられた($x^2(68)=148.439, p<.01$)。初級グループに比べ、「で」の使用が多く(<5><6><7>)、格助詞の使用に混乱がみられた。

表 4 調査結果(中級)

	を	に	が	で	その他
<1>	49▲	1	0	0	0
<2>	45	4	0	1	0
<3>	45	1	2	1	1
<4>	46	3	0	1	0
<5>	32▽	3	10▲	4▲	1
<6>	34▽	4	7▲	4▲	1
<7>	43	2	5▲	0	0

<8>	41	4	1	2	2
<9>	46	2	0	1	1
<10>	43	4	0	3	0
<11>	47	1	1	0	1
<12>	43	6▲	0	0	1
<13>	45	2	0	0	3▲
<14>	43	2	0	4▲	1
<15>	45	1	2	0	2
<16>	42	4	1	3	0
<17>	48	0	1	0	1
<18>	46	3	0	1	0

($x^2(68)=148.439, p<.01$)

▲有意に多い,▽有意に少ない, $p<.05$)

上級グループは、「を」以外の格助詞は明らかに少なく、文と格助詞に関連がみられなかった。

表 5 調査結果(上級)

	を	に	が	で	その他
<1>	26	0	0	0	1
<2>	27	0	0	0	0
<3>	27	0	0	0	0
<4>	26	1	0	0	0
<5>	25	0	1	0	1
<6>	25	1	0	0	1
<7>	26	0	1	0	0
<8>	27	0	0	0	0
<9>	27	0	0	0	0
<10>	25	1	0	1	0
<11>	26	0	1	0	0
<12>	26	1	0	0	0
<13>	27	0	0	0	0
<14>	26	1	0	0	0
<15>	27	0	0	0	0
<16>	25	0	1	1	0
<17>	27	0	0	0	0
<18>	27	0	0	0	0

($x^2(68)=58.424, ns$)

以上を総括すると、初級と中級では「～の中」などがない文では「を」を使用し、一方で「～の中」などがある文では「に」を使用していることがわかった。上級ではこのような助詞使用はみられなかったため、初級から中級の学習者特融のものとみられる。

5 まとめ

調査の結果から、次の2点が明らかになった。以上の結果をまとめると、韓国語を母語とする日本語学習者は、(1)のような文で迫田(1998)が指摘する一語化のストラテジーを持っている可能性があることが明らかになった。次に、初級・中級レベルまでは不自然な「に」を使用するが、上級レベルではほとんど見られなかったことから、上級レベルではある程度自己修正していくと考えられる。

本調査では、韓国語を母語とする初級から中級までの日本語学習者が、迫田(1998)が指摘する一語化のストラテジーを持っている可能性が高いことが明らかになったが、一方で、不自然な「に」を使用する原因を考察するには至らなかった。今後は、さまざまな母語話者を対象に、一語化のストラテジーが学習者の母語を問わず広く一般的に使われているのか、また、一語化のストラテジーがはたらく要因は何かについて明らかにしていくことを課題としたい。

6 日韓学生交流プロジェクト

6.1 交流プロジェクトの目的と実施概要

また、アンケート調査の協力者から、普段から大学の日本語の授業で文法を勉強しているが、アウトプットする機会がほとんどなく、格助詞の問題を含め日本語の運用能力に自信が持てないという声が多く聞かれた。2.2 で述べた通り、実際に学生たちは日本語母語話者と交流する機会はほとんどなく、授業内でネイティブ教師とするやりとり以外に、日本語運用能力を試せる機会がないという現状も明らかになった。また、同大学の学生と教師の両方から、日本語母語話者と交流できる機会を設けてほしいという要望も散見され

た。こういった現状を解決する一つの糸口として、日本の大学に在籍する日本語母語の大学生との交流活動プロジェクトを企画し、アンケート調査の終了と同時にプロジェクトを始動させた。プロジェクト参加者は、アンケート調査の協力者の中から希望者を募り、参加を希望した学生9名と、京都外国語大学にて日本語教師を目指す学生19名である。日本語学習者1名に対して日本語母語話者が1名～3名でチームを作り、全部で9つのグループが稼働した。教師はグループ活動には関与せず、原則学生同士で活動を行った。学習者の会話レベルは中級から上級程度で個人差はあるが、教師はほとんど介入せずとも有意義な交流ができていた。

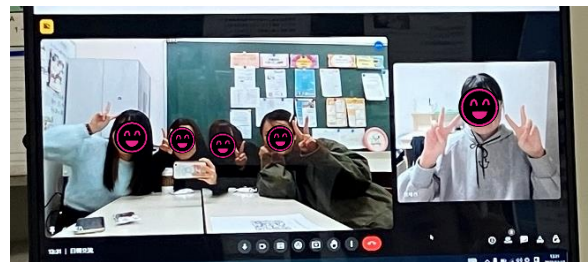
6.2 交流プロジェクトの結果

プロジェクト終了後に、参加者に感想を書いてもらった。韓国の学生たちからは「これまでずっと気軽に話せる日本人の友人を作りたいという夢があり、今回その夢が叶ってよかった(参加者 K3)」「関西方言に興味があったが、実際に使われている様子が見られて、関西方言のネイティブスピーカーから直接学ぶことができてよかった(参加者 K1)」「日本語の実力がわかり、これから何が必要なのかもわかった(K5)」「アルバイトの時に些細なことでも日本語を間違えるとトラブルになるのではないかと思い、これまで消極的な気持ちになっていたが、これからは安心して(自信を持って)できると思う(参加者 K4)」など、日本語を使うことに対して積極的な姿勢に変わったというようなコメントが寄せられた。日本の学生たちからは、「これまで互いに学習言語のネイティブ話者と関わる機会が少なかったので、交流できてよかった(参加者 J5)」「これを機に次は教える立場も挑戦してみたい(参加者 J8)」「将来日本語教師を目指す上で、どのような日本語の間違ひが多いのか、学習者はどのような語彙を難しいと感じるのか、これらを身近に体験できてよかった(参加者 J4)」など、相互の需要と供給が満たされたことに対する満足感や、学習者の立場を理解できたという声が聞かれた。

6.3 交流プロジェクトの振り返り

今回の交流プロジェクトを通して、双方の教育現場が抱える課題も明らかになった。一つ目に、JFL 環境の課題として、教室活動で非母語話者同士が日本語でやり取りする場面で、教師が感じている以上に学習者は負担と不自然さを感じ、それらを解消できる機会を求めているという点である。ある参加者は、「普段わたしたちが勉強している日本語を、日本人は本当に使うのか使わないのか、自分ではわからない。それが外国人っぽい言い方なのかもしれないし。(普段から日本のテレビ番組や YouTube などを見ているが、)授業で勉強した表現を実際にコンテンツでも使っているのをあまり見たことがない。」というような発言も見受けられた。今回の交流プロジェクトの参加者(学習者)は、普段の日本語の授業では十分に実力を評価されているのだが、一方で、教室活動以外で日本語を使う機会がほとんどないため、教室活動のレベルよりもさらに実践的に日本語を使い、自分の本当の実力を知り、伸ばせる機会を求めている。実際に、大学の授業ではアカデミックな日本語表現を中心とした構成になっていて、当然ながらそれもカリキュラムとして必要なのである。教師も学生がこのような葛藤をしていることは知りながら、カリキュラムを遂行するためには学生のモチベーションを目的に優先順位を変えることは当然できず、教師一人ひとりの日々の業務的な負担を考えると、今回の交流プロジェクトのような機会を安定して供給することは非常に難しいだろう。二つ目に、母語話者側が抱える課題として、日本語教師を養成するためのコース受講者でありながら、日常的に非母語話者と接する機会が少ないという点である。実習の授業や学内イベントのような場面では非母語話者と接することもあるが、いずれも一過性の付き合いになってしまっている。良い関係を築くためにはある程度の頻度・時間が必要だが、日常でそのきっかけをつかむことは難しい。ある参加者からは「韓国語を直訳しているような表現もあったりしましたが、韓国ではそう表現するのだなと新し

い発見になりました。」という感想が聞かれた。このような気づきを得るためにも、ある程度、信頼関係を築けるようになるために継続的に接する頻度・時間というのが必要とされていることがわかった。図1の様子からもわかるように、参加者全員が良い関係を築くことができ、交流が終了した現在もお互いに連絡を取り合っている。韓国や日本で実際に会う約束をしている参加者もいる。この交流プロジェクトをきっかけに日常的にも関係性が続いている。



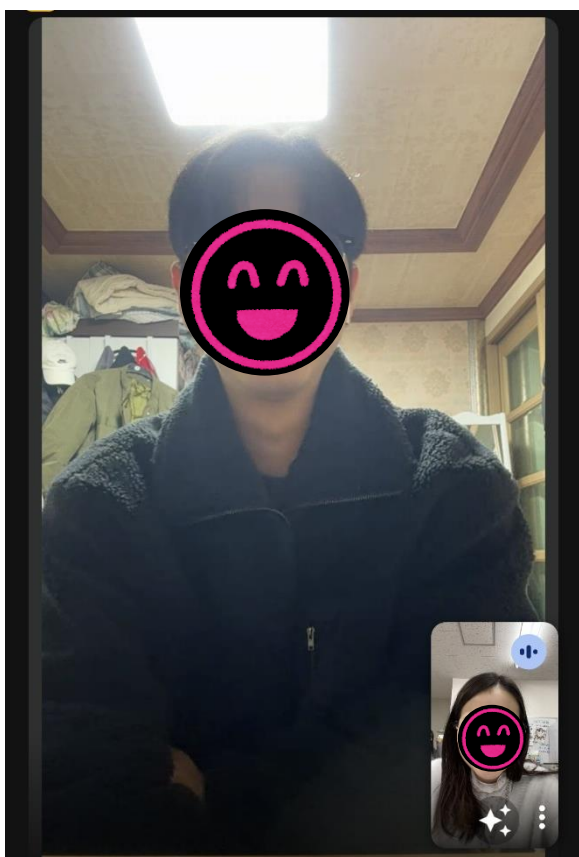
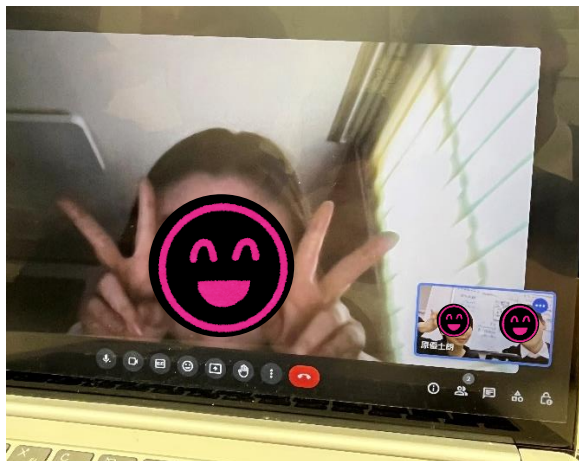


図 2 交流最終回の様子

7 まとめ

今回の活動の成果として、次の2点が挙げられる。第一に、助詞使用の調査においては、助詞習得に優位だとされてきた韓国語を母語とする日本語学習者でも不自然な「に」を使用するということが明らかになった。第二に、学生交流プロジェクトでは、現地の教師では供給が難しい需要を叶えることができ、日本語学習者の学習動機や文化理解に繋がられたこと、さらには、日本語母語話者にとっても学生同士という立場で非母語話者と交流を深めていくなかで、「正しい日本語」とは何か、「生きた日本語」とは何かなど、日本語学習に関する理解を深めることができた。本調査およびプロジェクトは、現地に行かなければ気づけなかった学生目線の需要や、現地の教師の葛藤など、長年課題だったが解決に至らなかった部分を良い方向に導くきっかけとしては十分な成果を得られたのではないかと考える。

本プロジェクトは、奨励プログラムとしての活動期間の制約により、2024年1月をもって交流プログラムを終了した。参加者の多くは今後も交流プロジェクトが継続されることを希望していたが、それに応えることができなかった点を残念に感じている。今回のプロジェクト参加者のほとんどは、個人的に連絡先を交換し、今後は個人対個人という関係で交流を続けていくとしている。今後は、日本語教師を目指す学生と日本語を話す機会に恵まれない学生を繋ぐために、現地の教師とも協力し、活動を慣例的に継続していけるよう連携を図っていきたい。

参考文献

迫田久美子(1998)「誤用を産み出す学習者のストラテジー—場所を表す格助詞「に」と「で」の使い分け—」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 128-134, 日本語教育学会。

Kara Moranski & Janire Zalbidea(2022) Context and Generalizability in Multisite L2 Classroom Research: The Impact of Deductive Versus Guided Inductive Instruction Language Learning, 72-1, p. 41-82, University of Michigan.